

# だいじょうぶ だいじょうぶ

いとう ひろし 文・絵

1 ぼくが今よりずっと赤ちゃんに近く、おじいちゃんが今よりずっと元気だったころ、ぼくとおじいちゃんは毎日のように、お散歩を楽しんでいました。

2 ぼくたちのお散歩は、家の近くをのんびりと歩くだけのものでしたが、遠くの海や山をぼうけんするような楽しさにあふれていました。

3 草も木も、石も空も、虫もけものも、人も車も。

4 ときには、たまごを運ぶありや鼻の頭をけがしたねこにさえ、古くからの友達のようにおじいちゃんは声をかけていました。

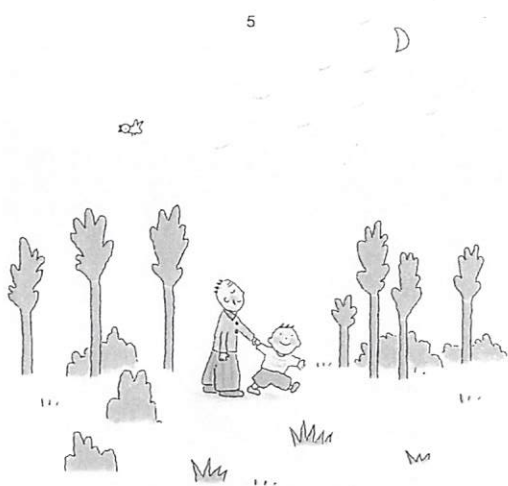
5 そんなおじいちゃんと手をつないでとことこ歩いていると、ぼくの周りには、まほうにでもかかったみたいにごんごん広がっていくのでした。

6 でも、新しい発見や楽しい出会いが増えれば増えるだけ、こまったことや、こわいことにも、出会うようになりました。

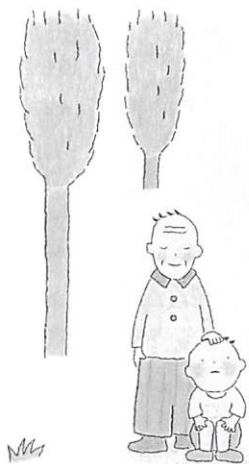
7 お向かいのけんちゃんや、わけもなくぼくをぶつし、おすましのくみちゃんは、ぼくに会うたびに顔をしかめます。犬はうなって歯をむき出すし、自動車は、タイヤをきしませて走っていきます。

8 飛行機は空から落ちることがあるのも知ったし、あちらにもこちらにも、おそろしいばいきんがうようよしてることもしりました。いくら勉強したって読めそうにない字があふれているし、何だか、このまま大きくなれそうにないと、思えるときもありました。

9 だけどそのたびに、おじいちゃんが助けてくれました。



増  
ふえる  
ソマツヤス





10 おじいちゃんは、ぼくの手をにぎり、おまじないのようにつぶやくのでした。  
「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

11 それは、無理してみんなと仲良くしなくてもいいんだってことでした。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

12 それは、わざとぶつかってくるような車も飛行機も、めったにないってことでした。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

13 それは、たいていの病気やけがは、いつか治るもんだってことでした。



めったにない

14 それは、言葉が分からなくても、心が通じることもあるってことでした。  
15 それは、この世の中、そんなに悪いことばかりじゃないってことでした。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

16 ぼくとおじいちゃんは、何度その言葉をくり返したことでしよう。けんちゃんともくみちゃんとも、いつのまにか仲良くなりました。犬に食べられたりもしませんでした。

17 何度も転んでけがもしたし、何度も病気になりました。でもそのたびに、すっかりよくなりました。車にひかれることもなかったし、頭に飛行機が落ちてくることもありませんでした。むずかしい本も、いつか読めるようになると思います。もっともっと、たくさんの人や動物や草や木に出会えると思います。



18 ぼくは、ずいぶん大きくなりました。おじいちゃんは、ずいぶん年を取りました。

19 だから今度はぼくの番です。

20 おじいちゃんの手をにぎり、何度でも何度でもくり返します。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

21 だいじょうぶだよ、おじいちゃん。

